



内なる生

霊的感覚を深め、
拡充するために

2月24日発売



イヴリン・アンダーヒル著／金子麻里訳

国教会の司祭たちのために語った3つの講話。多忙な牧師たちの魂のケアについて、また祈りと冥想、愛と奉仕について、平易で透徹した言葉で語りかける。原書は1927年刊行。

◆小B6判・148頁・本体1800円

■同じ著者の本

実践する神秘主義

普通の人たちに贈る小さな本

金子麻里訳

◆本体2100円

知的障害者と教会

2月8日発売

驚きを与える友人たち

フェイス・バウアーズ著／片山寛・加藤英治訳

教理や説教の知的理解に偏しがちな教会のあり方に対して、知的障害者の友は何を示しているのか。著者はダウン症の息子を持つ母。教会が開かれた場となるため、私たちの信仰観にチャレンジする。「まえがき——知的障害者の神学に向けて」（片山寛）と詳細な「訳者解説」（加藤英治）を付す。

◆四六判・250頁・本体1800円

■関連既刊書

せいなるよるのたからもの

出生前診断の結果にゆれる夫婦を描いた話題の絵本

絵と文Ⅱクドウあや／解説Ⅱ玉井邦夫

◆B5判・本体1300円

日本基督教団戦争責任告白から50年

その神学的・教会的考察と資料

「時の徴」同人編「新教イノニア33」

1967年復活主日、日本基督教団は教団議長鈴木正久名で「第二次世界大戦下における日本基督教団の責任についての告白」を公にした。それから50年、教団戦責告白は大きな論争と分裂を生むと同時に、他教派にも同様の告白を生み出す刺激を与え、また教会内外に新たな連帯を生み出してきた。教団戦責告白とは何だったのか。「時の徴」に連なる者たちが自分史的な回顧を交えつつ神学的に考察する。

◆A5判・160頁・本体1500円

〔目次より〕

まえがきに代えて 戦争責任告白と二人の牧師

第1部 論考

「戦争責任告白」五十年

戦後七〇年と福音派諸教会の戦責告白

戦争責任告白はいかにして成立したか

第2部 戦責告白とわたし

教団の牧師となることを決意させた戦責告白

教団の信仰への問い・促しとして

戦争責任告白とわたしの歩み

佐藤司郎
山口陽一
戒能信生
秋永好晴
池田 伯
岩井健作
内坂 晃

戦争参加（予科練）から戦争責任告白へと私
を導いた神の恵み
大塩清之助

「讃美歌21」をめぐる

「戦争責任告白」の重要性は増すばかり

韓国キリスト者たちとの和解と戦責告白

戦責告白はわたし自身の告白である

沖繩キリスト教会の「戦責告白」

北東アジアの希望のために

解放の神学のことなど

戦責を告白する主体の確立
第3部 資料編 各教派・団体の戦責告白
改革派、バプ連、バプ同、日キ、ナザレンほか

小海 基

下田洋一

鈴木伶子

関田寛雄

平良 修

池 明観

松本敏之

最上光宏

●恵みとは何か

事実によりて 生と死を貫く証し

西田恵一 著

（著者は横浜女学院、青山学院中等部を経て、和泉短期大学准教授、チャプレン）

著者は2人の息子と妻を病で天に送るという痛切な経験をした。そこで何が与えられたのか。ミッションスクールで若い魂との向かい合いから紡ぎ出された珠玉のメッセージ。

◆四六判・174頁・本体1500円



木ノ脇悦郎著

宗教改革の人間群像

エラスムスと
文通者たち

『痴愚神礼讃』を著し、新約聖書のギリシャ語本文を初めて校訂し、宗教改革運動に寄与したが、自由意志論をめぐってルターと対立、後に改革陣営から絶縁された16世紀最大の人文主義者。彼はまた偉大な文通者でもあった。書簡から浮かび上がる改革者たちの人間群像。

◆四六判・予価3000円

三野和恵著

文脈化するキリスト教の軌跡

宣教師キャンベル・ムーデイと台湾長老教会（仮題）

日本植民下の台湾というコンテクストの中で福音というテクストをいかに語るのか。スコットランド長老教会からやってきたムーデイ、彼と接した台湾人キリスト者たち双方の軌跡とその意味を、白話字文献も含む膨大な資料を基に丹念に跡づけた労作。

◆A5判・予価7000円

山口里子著

イエスの譬え話2

罪人と名指され、十字架の上で果てたその生において、イエスが伝えようとしたメッセージとは何だったのか。福音書記者の編集の行間を歩み、イエスの言葉の核心を取り出す「疑いの解釈学」の最新成果。「10人の乙女たち」など解釈困難とされてきた譬え話が、全く新たな姿を見せる。「イエスの譬え話1」待望の続刊。

◆A5判・予価2100円

● 1月に出た本と雑誌

旅する教会

再洗礼派と宗教改革

永本哲也、猪刈由紀、早川朝子、山本大丙〔編〕



再洗礼派（アナバプティスト）は宗教改革主流派から徹底的に弾圧され、安住の地を求めて世界を旅する教会となった。しかし彼らの信仰理解と社会実践は貴重な遺産を残している。宗教改革500年の

年、もう一つの重要な改革運動の全容を明らかにした、気鋭の研究者たちによる共同執筆。

◆四六判・本体2800円

〔重版出来〕

人は何によつて生きるか

松永晋一著

永遠への思い、出会い、賜物、自己の発見、使命、聖書、信仰、愛、希望、教会生活——10のテーマに沿いながら若者たちに語る信仰論。

◆新書判・本体640円

福音と世界

◆税込635円

2月号―特集 義とは何か

宗教改革500年②

寄稿者…竹原創一、吉田忍、池田裕、吉谷かおる、島しづ子、林巖雄、ベルトルト・クラッパート、芦名定道、望月麻生、内田樹、佐藤優、辻学、月本昭男、吉松純、奥田愛基ほか

●2月は4点の新刊を準備しています。『内なる生』は、小社が手がけるイヴリン・アンダーヒルの訳書としては2冊目。同書はかつて『衷なる生活』と題して出されたことがありました(中山昌樹訳、1929年、教文館)。原書の刊行はちょうど90年前ですが、その言葉はまったく古びていません。「内なる生」とは何でしょうか。著者は言います、「私たちの最も『内奥の生』は、聖霊の世界との『意志ある呼応』から成ります」と。「意思ある呼応」とは「祈り」のことですが、それは結局「神への愛」と「人類への愛」において一つとなる、しかも「恐ろしく実践的な務めであり、神の国をもたらすことに貢献しうる唯一の道」、したがって「これは神学的な言い換えによつては成就しません」とも。アンダーヒルの「神秘主義」と言われるものが社会的で実践的な志向をも含んでいたことを見逃してはならないと思います。

●『知的障碍者と教会』は、教理や説教のいわゆる「知的な」理解ができない人々、言葉による「信仰告白」がおぼつかない人々にとつて、信仰とは何か、礼拝に出席し教会生活を送ることの意味は何か、逆にまた彼らの存在が教会にとつて持つ意味は何かを、具体的な出会いを通して考察したものです。著者が自覚的な洗礼を重んじるバプテストの信徒であり、同時にダウン症の息子を持つ母であることが、この問いをいっそう喫緊なものとなりました。津久井やまゆり園の衝撃的な事件を経験した私たちにとつても、決して無縁の問題ではありません。

●今年には宗教改革500年の記念の年であることに多くの関心が寄せられています。日本基督教団の戦争責任告白から50年の年でもあります。あの戦争責任告白は一教団のドキュメントにとどまらず、他教派にも大きな影響を与えました。が、なによりも教会と世との関係について、信仰告白について、そして罪責告白について、原理的な考察を迫るドキュメントであり、神学的な事件でもありました。『日本基督教団戦争責任告白から50年』は、あの告白がもつていた意味を改めて検証し、その批判的継承の必要を訴えています。

福音と世界

2017年

3

A5判・80頁・定価635円・送料70円
年間予約購読料(送料共)8460円

特集・正統と異端——宗教改革500年③

アルミニウスに対する異端宣告をめくつて

木ノ脇悦郎

曖昧になる「正統」と「異端」の境界——

宗教改革後の再洗礼派と近世ヨーロッパ社会——

永本哲也

マルキオン聖書再考——異端反駁文書に書かれないこと

筒井賢治

異端とセクシユアリティ

朝香知己

多様性の時代と「異端イジメ」の病理——

北村慈郎牧師戒規免職の底流にあるもの

渡辺英俊

日本基督教団戦争責任告白から50年

徐 正敏/長尾有起

東日本大震災から6年 現在の課題

柳谷雄介/片岡輝美

【連載より】

◆みことば散歩 3 望月麻生

◆現代神学の冒険 6 芦名定道

◆新約釈義 第一テモテ書 13 辻 学

◆聖書とわたし 14 久米小百合

◆レヴィナスの時間論 24 内田 樹

◆詩篇の思想と信仰 142 月本昭男